

2. 磨製石斧製作工程の復原とその流通

宮山遺跡を原石採取地点に設けられた磨製石斧製作のための作業所的なムラとの位置づけを考えたが、出土した石斧未成品から、その製作工程をうかがい知り、その分布から地域間の交流の実態を解明し、そして弥生時代における社会的分業のあり方を考えるなど、派生する問題は様々である。これらすべてに詳論を及ぼすことはできないが、本報告書の末尾にあたり、できる限りの整理をつけておきたい。

(1) 石斧の種類と製作工程について

宮山遺跡で出土した磨製石斧の未成品には、重量感があり両刃をもつ伐採斧と偏平片刃石斧、柱状片刃石斧などの加工斧があり、それぞれ製作工程を示すと考えられるものが認められる。

伐採斧と加工斧の比率は圧倒的に伐採斧が多いと考えられる。その出土比率は、およそ伐採斧8に対し、加工斧は2ほどである。これは大半はあくまでも未成品、とくに失敗作を通してみた上での判断であり、伐採斧が製作工程でより破損しやすい可能性を含むが、分析結果で示されたように比重がきわめて大きいという使用石材の特性から考えても、生産対象の中心は伐採斧に置かれていたのではないかとされる。

酒井龍一氏は、弥生時代の石器組成を分析した結果、伊勢湾沿岸地方の納所遺跡や朝日遺跡などから出土した磨製石斧は、太型蛤刃石斧が過半数を占め、加工斧は偏平片刃石斧が主体となり、偏平片刃石斧と柱状片刃石斧とが比率的に半々となる近畿地方中央部の様相と異なる点を指摘している（酒井1986）。生産地である宮山遺跡の加工斧のあり方も、酒井氏が指摘した伊勢湾沿岸地域の状況とほぼ一致する。

弥生時代の伐採斧といえば、一般的に両刃で石斧の横断面が厚い、いわゆる太型蛤刃石斧と呼ばれるものが西日本では主流を占めるが、宮山遺跡の場合、両刃であることは伐採斧の必要条件としても、石斧の厚さや基部の形状などからすると、むしろ典型的な太型蛤刃石斧と呼べないものも含まれる。

未成品、とくに製作過程で生じた失敗作である点を考慮に入れる必要があるが、ここでは伐採斧を以

下の2つのタイプに大別することにした。

伐採斧Ⅰ 側縁が平行し、厚みのある基部で、断面形は膨らみのある楕円形となる。いわゆる太型蛤刃石斧あるいはそれに近い形態のもの。長さ20cmを超える大型のものと長さ13～16cm程度の中型のもの、さらに長さ10cm以下の小型のものがある。

伐採斧Ⅱ 側縁は平行するか、刃部に向かって幅広となり、基部は厚みがあり、断面形が円形に近い。いわゆる乳棒状石斧。

本来の完成品を宮山遺跡で見いだすことができないので、他遺跡出土のものを加え、それぞれのタイプの製作工程の各段階を第81図に示した。

磨製石斧の製作は、原石を粗割り、剝離成形し（第1工程）、敲打して整形する（第2工程）。そして全面を研磨し、刃部を仕上げ（第3工程）、完成品となると考えられる。第1工程は、原石の粗割りとその後の剝離成形とは別の工程として分けるべきかもしれないが、未成品そのものからその区別は難しい。

(2) 宮山遺跡を通じた石斧生産の実態

宮山遺跡では原石として使用可能と考えられる石材が近辺より採集可能だが、剝離成形の際に生じる剝片は出土しているものの、原石の自然面を片面にもつ剝片は少なく、あるいは第1工程である原石の粗割りは青川の河原など、他所である程度行われた可能性も否定できない。

また、宮山遺跡では磨製石斧以外の石製品として、石剣あるいは石棒の一部とみられるものが出土しているが、これは結晶片岩系の石材が使用されており、当遺跡周辺で製作されたものではない。宮山遺跡では磨製石斧のみが製作されていた可能性が大きい。

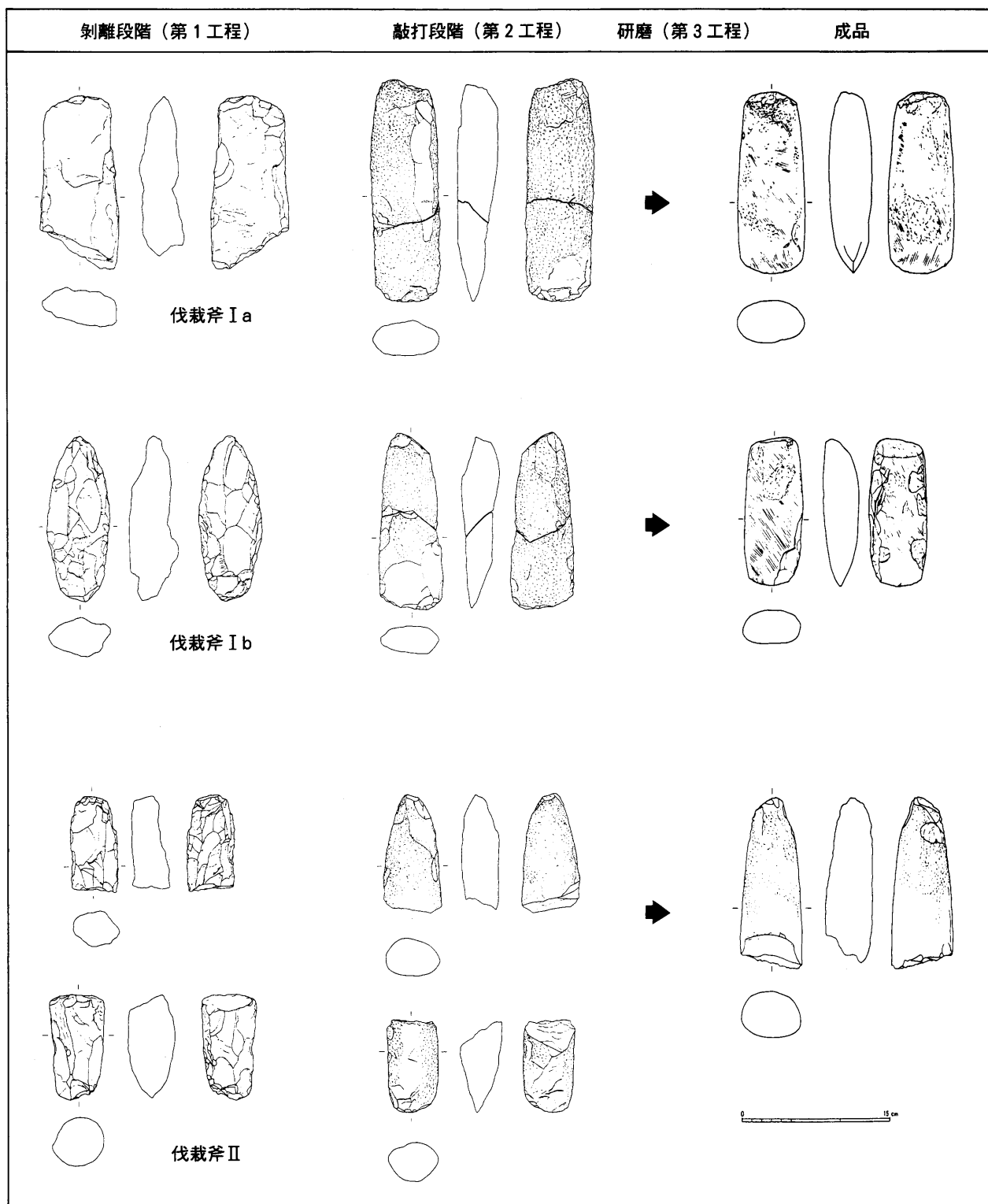
伐採斧の場合、第2工程の敲打段階での破損品が最も多く、伐採斧の6割にものぼる。逆に良品の完成品が見いだせない点も合わせて、今山遺跡などの石斧製作遺跡の一般的なあり方と共通する。

最後の工程である研磨について、石黒立人氏は宮山遺跡では砥石の比率が低いことから、敲打整形後の未成品を出荷するとの見通しをつけられている（石黒1997）。

これは消費地での実態、すなわち刃部未研磨のものが集落遺跡で出土するか否かとも関わる問題ではあるが、宮山遺跡の場合、確かに砥石の出土量からすると、製作された石斧のすべてが研磨されたと考えにくいといえるかもしれない。

それでも恒常的な研磨により、研ぎ減りがかなり

進んだとみられる置き砥石も存在することから、自己消費としてのみ石斧の刃部の研磨に使用されたにとどめるにも疑問が残る。あるいは製作された石斧の一部に限っては、最終的な研磨工程まで行い、他所へ運び出していたことも、現象面的には考えられるのではないだろうか。



第81図 磨製石斧の製作工程図 (1:6)

(伐裁斧 I のうち a は大型のもの、b は中型のもの)

また、伐採斧Ⅰ・Ⅱの形態上の差は、伐採斧Ⅰがカシ材などの常緑広葉樹の利用のため弥生時代になって新たに登場した、いわゆる太型蛤刃石斧ないしそれに類するものであるが、伐採斧Ⅱはいわゆる乳棒状石斧と呼ばれる、縄文時代以来使用されている磨製石斧の形態を受け継いだものである。

伐採斧Ⅱは主に東海地方以东の東日本では弥生時代にも引き続き利用されていることが一般に認められており、伊勢地方でも津市納所遺跡などで少ないながらも存在する（第76図G15）。

宮山遺跡では伐採斧Ⅰ・Ⅱの両者が製作されたことから、西日本と東日本の狭間となる地域に当遺跡が位置づけられるとともに、弥生時代的な伐採斧Ⅰにすべて伐採斧の生産が傾くことなく、伐採斧Ⅱの生産も同時に行っていたことで、東海以东でこの種の形態の石斧を使用し続ける地域も意識し、その流通の射程に入れていたことを評価して良いと思う。

（3）加工斧の地域的特色

一方、加工斧は前述したようにその出土量が伐採斧に比べかなり少ないことから、生産量そのものが寡少であったと考えられるが、伐採斧で多かった敲打整形段階での欠損が生じにくく、ひいては生産上のロスが少なかったというのも宮山遺跡での伐採斧、加工斧の両者の出土量の差異となって表れたことも考えられよう。

加工斧である偏平片刃石斧や柱状片刃石斧が、形態的に剝離成形の段階で、仕上がりの状態にかなり近づくため、敲打整形が伐採斧のようにさほど重要な工程とならなかったと思われ、剝離成形から研磨までの工程が比較的スムーズに進められ、破損の危険性も少なかったと考えられる。

また、片刃ではないが、さりとて両刃石斧＝伐採斧とかたづけられないものもある。（第48図232・233・239・240）など、長さがあり両刃を作りだすものの、幅が5cmに満たず、厚みもない短冊型のものは、伐採斧としての使用にはあまり実用的でない。

一方、偏平片刃石斧の形態をとりながら、両刃となるものも地域によっては、認められることが指摘されている（国立歴史民俗博物館1996）。一般に消費

地遺跡では研ぎだしを繰り返すうち、元の形態に比べ、長さが著しく短くなるものがみられるが、これらとはもちろん異なるものである。

こうした偏平片刃石斧の形態をとる両刃石斧は、三重県内でも出土をみるが、四日市市永井遺跡では、柱状片刃石斧でありながら両刃に作りだされたものもあり、定角式石斧と紹介されている一志町高野の端山遺跡でも同様のものとなる可能性が大きく、刃部形態が必ずしも伐採斧と加工斧という機能に直結しない状況がある。ただしこれは製作段階に決定されるものではなく、あくまでも使用者側の選択の問題であろう。

加工用の工具として石斧を用いる場合、当然片刃がより機能的であると考えられるが、縄文時代以来の両刃に作りだす伝統が使用者側に根強く残った場合もあったと受け取ることができる。

（4）分布時期とその流通

ハイアロクラスタイト製磨製石斧は、伊勢地方をはじめ、尾張・三河といった広い範囲で出土しているが、今回の堀木氏の分析の結果だけみても、直線距離にして40km以上離れた津市納所遺跡からでも磨製石斧に関しては主体を占めるほどである。

堀木氏のこれまでの分析成果からすると、愛知県清洲町の朝日遺跡をはじめ、甚目寺町阿弥陀寺遺跡、西尾市岡島遺跡、三重県内では明和町金剛坂遺跡まで、直線距離にしても60km以上は離れた範囲にも広がっていることになる。

これは仮に宮山遺跡およびその周辺の遺跡で製作されたものが分布するのだとすれば、当然共同体内での流通の範囲を超えるものであり、石斧自体が交易されたとみる方が自然である。

ただしこれには宮山遺跡あるいはその周辺で出土する石斧とそれぞれの遺跡から出土する石斧との形態・技法などの諸特徴の比較検討も必要となろうが、宮山遺跡内だけでも伐採斧に形態差がみられたように、現実的には石材・製作地の違いによって何らかの差が見いだせる可能性は小さい。

宮山遺跡では弥生時代中期のうちでも中葉～後葉（Ⅲ～Ⅳ期）にかけての時期に生産が限定される。中期には同石材の石斧が、東海地方に分布を広げるこ

とは注目に値する。また、弥生後期以降は一般に鉄素材の普及により、石斧の生産も衰退することから、宮山遺跡の状況もこれと軌を一にするとと思われるが、弥生中期前半以前はどうだろうか。

愛知県幸田町の東光寺遺跡では縄文時代晩期の磨製石斧にわずかながらハイアロクラスタイトが使用されている(堀木ほか1994)ほか、宮山遺跡周辺に位置する野々田遺跡や中山遺跡など、縄文時代の遺跡からもハイアロクラスタイトを用いた石斧およびその未成品が出土することから、同石材の利用は縄文時代にまで遡るのは明らかである。

しかし宮山遺跡では、縄文晩期を中心とした住居跡群が確認されたB地区からは、石斧の未成品はおろか製作段階の剥片なども含めて、ほとんど出土していない。

さらに弥生前期～中期前半の状況を考えるために、三雲町中ノ庄遺跡を採り上げたい。中ノ庄遺跡は、津市の南に位置し、三渡川下流の砂堆地帯に展開する遺跡で、宮山遺跡とは直線距離にして55kmほど離れ、伊勢平野で最も早く遠賀川文化が定着したとされる場所である(谷本1972)。

遺跡は、弥生時代前期中段階から中期前半にかけての遺構・遺物がみられ、若干の磨製石斧も出土している。伐採斧と考えられるものはいずれも横断面が扁平で、大型蛤刃石斧とは形態的に隔たりが大きく、むしろ縄文時代のそれに近い。しかしながら、石斧石材にはハイアロクラスタイトが含まれている。

中ノ庄遺跡のハイアロクラスタイト製石斧は、残念ながら前期に遡るものか中期前半のものかの区別ができない。しかし、宮山遺跡では生産が開始される以前にはなるが、弥生中期前半にはハイアロクラスタイト製の石斧は広範囲に広がっているとみてよさそうである。

また、四日市市の大谷遺跡や永井遺跡の磨製石斧は、前期に属する可能性があり、しかもハイアロクラスタイトが使用されているが、宮山遺跡とは流域が異なるとはいえ、基本的には大谷・永井の両遺跡で石斧石材を求めれば、最も近いのは鈴鹿山麓ということになり、ハイアロクラスタイト製石斧の遠隔地への供給例とはみなし難い。

原石の限定的な産出に比して、製品である磨製石

斧の広範囲な分布は、もちろん石材が伐採斧用として優秀であったことに起因するであろうが、消費地である集落遺跡で原石や剥離成形段階の石屑がみられないという点からすると、原石を直接採集地より集落へ持ち込むことより、宮山遺跡のような製作遺跡の介在が必須となり、やはり分業および流通体制の充実がその背景にあることになる。

以上のことを考え合わせると、少なくとも当地域の磨製石斧の場合、これを集中生産し、遠隔地の遺跡へ供給するという流通のシステムは、縄文晩期までは確立しておらず、確実には弥生中期中葉、可能性として弥生中期前半には機能していたと考えたい。

宮山遺跡で製作された石斧は、眼下に流れる員弁川を利用し、運搬されたと考えるのが妥当であるが、宮山遺跡が作業所的なムラとすれば、製品を一旦集積し、各地に配送するおそらく拠点的な集落遺跡の存在も考える必要がある。員弁川下流域(現桑名市周辺)にその候補が求められるが、西金井遺跡など若干の弥生中期の遺跡は存在するものの、現時点では拠点的な集落とまでは認識され難く、中流域も視野に入れて今後の発見を待つか、あるいは流域を異にする集落遺跡がこの役割を担っていた可能性を考えるかは、課題として念頭に置いておきたい。

弥生中期段階における石器生産の専門化は、北部九州では今山遺跡の石斧や立岩遺跡の石包丁の広範囲な流通を根底に据えて古くから論じられてきている。とくに下条信行氏の詳細な論究は当時の分業体制や流通構造に迫り、北部九州の地域性を明確にした(下条1975・1983)。しかし他地域での検討にはこれまで資料的な制約も大きかったが、こうした問題を議論することができる遺跡が東海地方でも発見された意義は大きい。

参考文献

- 石黒立人(1997)「手工業生産と弥生社会をめぐるラフ・スケッチ」『考古学フォーラム』8
- 国立歴史民俗博物館(1996)『農耕開始期の石器組成1 近畿(大阪・兵庫)・中国・四国』
- 酒井龍一(1986)「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財学報』第4集。
- 下条信行(1975)「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』第22巻第1号

下条信行（1983）「弥生時代石器生産体制の評価」『古代学
叢論』
谷本鋭次（1972）『中ノ庄遺跡発掘調査報告』

堀木真美子ほか（1994）「朝日遺跡の弥生時代の石器をめぐっ
て」『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』

報 告 書 抄 録

ふ り が な		みややまいせき						
書 名		宮 山 遺 跡						
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名		三重県埋蔵文化財報告						
シ リ ー ズ 番 号		1 8 6 - 2						
編 著 者 名		竹 内 英 昭						
編 集 機 関		三重県埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965-2-1732						
発 行 年 月 日		1 9 9 9 年 3 月 3 1 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みや やま い せき 宮 山 遺 跡	いな べ ぐん だい あんちよう 員 弁 郡 大 安 町 かた ひ あさ みや やま 片 樋 字 宮 山	243230	1	35° 7' 20"	136° 32' 00"	19950508 19960118	12,260	一般国道475号 東海環状自動車 道建設に伴う事 前調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
宮 山 遺 跡	集 落 跡 墳 墓	縄 文 時 代	平地住居跡	21棟	縄文土器・石鏃・石錘		石斧製作遺跡	
			土器棺墓	1基				
		弥 生 時 代	竪穴住居跡	13棟	弥生土器・石斧未成			
			掘立柱建物	4棟	品・石斧製作工具類			
			方形周溝墓	1基	弥生土器			
前方後方形墳丘墓	1基		土師器					